

## ローマの信徒への手紙 「恵みと信仰——キリスト教の根幹」

司祭 ヨハネ 井田 泉

「ローマの信徒への手紙」(ローマ書)はパウロが書いた中でもっとも重要と言ってもよい手紙です。パウロは、いずれローマに行きたいと切に願いつつ、先にイエス・キリストの福音の内容をまとめた形で書き送りました。紀元50年代半ばとされます。難解な箇所もたくさんあるのは事実ですが、これはただ理論的なことを並べたというものではありません。パウロ自身が命がけで経験したイエスとの出会いと、救われた喜びが背景にあります。彼はこの手紙で、人が生きて死ぬことのできる救いの道を切実な思いと情熱をもって語っています。歴史的にもこの手紙は大きな影響力を持ち、16世紀の宗教改革の際にはその重要な原動力の一つとなりました。

昨年2017年はマルティン・ルターによる宗教改革開始500年の記念の年にあたりましたので、初めにルターの言葉を少し紹介しましょう。ルターは人々がみ言葉に直接触れることができるように、原典から聖書をドイツ語に翻訳しました。そして読者の助けになるように、各巻に序文を書きました。

### 1. ルターの「ローマの信徒への手紙序文」から

冒頭はこうです。(下記引用は『ルター著作選集』教文館、2012から)

「この手紙は新約聖書の真の主要部分であって、最も純粋な福音である。これこそまさに、キリスト者が一字一字暗記するばかりでなく、魂の日ごとのパンとして毎日これと関わるに相応しく、またその価値のあるものである。」

信仰に関してはこのように語っています。

「しかし、信仰は私たちのうちにおける神の働きである。この神の働きは私たちを変え、私たちが神によって新しく生まれさせ——ヨハネによる福音書1章[2節]——古いアダムを殺して、私たちを、心、勇気、感覚、あらゆる力をもった別の人間とし、聖霊をもたらす。」

この箇所の古いドイツ語原文を、昔からの「フラクトゥール」と呼ばれる文字で写しましたので、雰囲気を感じてみましょう。今の綴りとは少し違います。

Wer Glaube ist ein Göttlich werck in vns / das vns wandelt vnd new gebirt  
aus Gott / Joha. j. Vnd tödtet den alten Adam / machet vns gantz ander  
Menschen von hertzen / mut / sinn / vnd allen krefftten / vnd bringet den heiligen  
Geist mit sich. (https://www.stilkunst.de/lutherbibel-1545/)

ルターのこの序文で印象的なのは、「心の底」hertzen grund= Herzensgrundということを非常に強調していることです。

「人間の律法ならば、心がそこになくとも、行いだけで十分これを満たせる。しかし、神は心の底をお求めになる。だから神の律法も心の底を求め、行いで満足させられずに、むしろ、心の底からの思いなしになされた行いを、偽善や偽りとして罰する。」

今日はローマ書の中から、わたし自身の生きてきた歩みに関わる、ほぼ三つの箇所に絞ってお話しするつもりですが、手紙の最初の挨拶を読んでおきましょう。

## 2. 挨拶

「1:1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、——2 この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、3 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。5 わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。6 この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。——

7 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

まず差出人である自分の名前を記し（口述筆記かもしれません）、その自分について短く紹介したとき、パウロは「神の福音」と言いました。するとその「神の福音」について、またそれと関わる自分の使命について、語らずにはいられなくなりました。長い挿入ですが（2～6 節）、ここに彼の熱い思いとともに、重要な内容がこめられています。そして最後に宛先が記され、祈りで結ばれます。

今、冒頭の挨拶が祈りで結ばれていると言いましたが、手紙の終わりのほうの 15 章では何度も祈りが繰り返され、手紙の最後は頌栄——神への賛美で閉じられます。

「16:27 この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。」

大切にしたいのは、この手紙は祈りつつ書かれたのだ、ということです。大事なことをはっきりと言葉にして伝えることができるように、それが相手の心に届くように、神が、聖霊が働いてくださるように——そのように祈りつつパウロはこの手紙を書いたに違いありません。それですからわたしたちも、この手紙をただ頭で理解しようとするのではなく、祈りをもって心に受けとめたいと思うのです。

## 3. 神の義

取り上げたい第 1 のテーマは「神の義」です。パウロは人類の罪と律法について述べた後、いよいよ本論に入っていきます。新共同訳では「信仰による義」という見出しが付けられています。

「3:21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与え

られる神の義です。そこには何の差別もありません。23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、24 ただキリスト・イエスによる<sup>あがな</sup>贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

宗教改革の標語のように言われる言葉の一つが「信仰義認」です。人は行いによってではなく、信仰によって義とされる。「義とされる」とは、「神の前に正しい者と認められる」「よき者、神によって愛される者として受け入れられる」という意味です。「救われる」と根本的に同じですが、救いの内容をパウロがより明確に表現したものです。

ルターは長年、この「神の義」という言葉に苦しみました。ルターは非常な努力をして神の前に正しくあろうとしました。ところが努力すればするほど、少しでも間違いがあればそこを追及して罰するのが「神の義」だと思っていたのです。それでは自分は永遠に救われない。「神の義」は恐ろしい。ついにルターは「義の神」を愛せないどころか、憎むようにさえなったといいます。ところが彼は長く詩編を研究し、それを学生たちに講義しているうちに、「神の義」とはそういうものではない。自分で獲得するものではない。神の義は、神から恵みとして、贈り物として与えられるものだ、という発見に至りました。神の義は、喜びとなり祝福となった。これが宗教改革の重要な土台になります。

ところで一般には「信仰義認」と言われ、「イエス・キリストを信じることによって救われる」と説明されることが多いのですが、それでいいのだろうか、という疑問をわたしは持っています。

### 3:22 「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義」

と新共同訳では訳されているのですが、「を信じること」は翻訳の際に補われた言葉です。ギリシア語原文は *διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ* (ディア ピステオース イエスー クリストウ)。直訳すれば「イエス・キリストの信仰」あるいは「イエス・キリストの真実」によって、です。

「イエス・キリストを信じる (わたしたちの) 信仰によって」義とされる (救われる) のか、それとも「イエス・キリストご自身の真実 (まこと) によって」義とされる (救われる) のか。

これは研究者の間でも論議が続いている課題です。実はこれはわたしにとっては大問題だったのです。40年と少し前の神学生時代のことです。当時わたしは神さまを見失って闇の中にいました。神を信じたいけれども確信が持てない。必死で神を求めているのですが、信仰があるのかなのかと問われれば、信仰がない、といったほうが近い。もし「信じることによって救われる」のであれば、信じることのできない者 (わたし) にはもう救いはないのか。これがわたしの呻きでした。当時の詳しい経緯は忘れましたが、「イエス・キリストご自身の真実によって義とされる」というのであれば、不信仰なわたしも救われる望みがある。これしかない、と思ったのです。救いは、自分の側の信仰にかかっているのではない。イエス・キリストご自身の真実が、不信仰なわたしを、到底義ではあり得ないわたしを、それでも義としてくださるのです。

この読み方、訳し方を教えてくれたのは、カール・バルトというスイスの神学者です。新約聖書学者の多数は「イエス・キリストを信じる信仰によって」義とされる——「信仰義認」の解釈だそうですが、わたしは「信仰義認」に対して、「(イエス・キリストの) 真実義認」という理解をしたい。今、詳細に議論を展開することはできませんが、ただパウロ自身が上記の 24 節で

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」と述べて、キリスト・イエスご自身の働き、神ご自身のわたしたちに対する恵みを強調していることに注目しておきましょう。

#### 4. 一人の従順によって——アダムとキリスト

第2のテーマは「アダムとキリスト」です。第5章はわたし個人にとっても一番大事なところですが、ルターは『ローマ書講義』（1515年）の中で次のように言っています。

「使徒は本章においてこの上なく喜ばしい、この上なく溢れる喜悦をもって語る。全聖書のうちにも本章に比すべきテキストはほとんどひとつも見当たらない。」（新教出版社、1983）

前半から数節を読んでみましょう。

「5:5 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」

「5 わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている」

これはすでに起こってしまっている、言わば客観的な事実です。わたしたちが想像したり思い込んだりするのではない、神の側からの事実。これが恵みです。わたしが信じる／信じない、受け入れる／受け入れない、に関係がない。しかしその事実をわたしのこととして知る、認識する、経験する——これが信仰です。わたしたちの信仰が先に立つのではなく、神の恵みの事実が先にある。それがわたしたちに働きかけている。そしてわたしたちがそれを知らされて知ったとき、わたしたちの側に大きな喜びが起こります。神の恵みがわたしたちを動かし、わたしたちを生かすようになる。信仰とは、神の恵みの事実に対してこちらの心の目が開かれ、耳が開かれて、わたしたちの口と体でそれに答えて生きる。恵みに動かされ、影響され、生かされて、こちらからも熱心に生きるようになることです。

今回のタイトルを「恵みと信仰——キリスト教の根幹」としたのですが、それはこのところからです。「わたしたちは神の恵みにより、信仰をとおして、救われ、生かされる」と言ったらいいでしょうか。

ただし土台は神の恵みです。土台をはっきりさせておく必要があります。パウロはここでこう言いました。

「わたしたちがまだ弱かったころ」「わたしたちがまだ罪人であったとき」、そのときに「キリストがわたしたちのために死んでくださった。」不信心な者を救おうとされる神の決意と行動がすでに実行された。そうであれば、不信心、不信仰な者も救いの内に招き入れられています。

この後、5章の後半は「アダムとキリスト」という小見出しが付いています。

「5:12 このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。13 律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。14 しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。」

「一人の人によって罪が世に入り……」。この「一人の人」とはアダムです。神に背き、罪を犯し、苦しんで、やがて滅びていく。このアダムが、言わば全人類の代表です。アダムにおいて起こったこと、それはあらゆる人に通じている。アダムの連帯——これはわたしが勝手に使う言葉ですが——の中にわたしたちすべては閉じ込められてしまっている、というのです。どうしようもない悲しい人間の現実です。

ところが、それが結論ではありません。アダムではなく、もう一人の方がいてくださるのです。

「5:15 しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。16 この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。17 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。」

一人の人イエス・キリストが、全人類の罪と死と滅びを引き受けて、そうしてアダムの連帯の中に閉じ込められたあらゆる人々を解放されるのです。アダムの連帯が強力であったとすれば、それよりはるかに強力なイエス・キリストの存在と業がアダムの連帯を打ち砕き、あらゆる人々をご自分のもとの引き寄せられる。アダムの連帯ではない、キリスト連帯——これもわたしの言葉ですが——のうちにわたしたちは入れられるのです。人類の代表者はアダムではありません。イエス・キリストが人類の代表者なのです。

「5:18 そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。19 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。」

だれ一人神に対して従順ではありえない。ただ一人イエス・キリストが神への従順を貫いて生き、死なれた。このゆえに、わたしたちは罪人でありながら、不従順でありながら、それにもかかわらず神は、わたしたちを正しい者、愛する子として受け入れてくださる。これによって魂は休らうことができます。

むつかしい理屈のように聞こえたかもしれません。しかしわたしはこの箇所、この言葉で生き

ながらえることができたのです。30数年前、わたしはあることで心に深い負い目を抱えていました。神学校の教師になりたての頃でした。特別何か悪いことをしたわけではありません。だれかがわたしを責めたのでもありません。秘密を隠していたのでもありません。けれどもわたしは、ある具体的なことで、自分の仲間たちを、同志を裏切ったという思いに苦しんでいました。そのことが心にのしかかってくると、食事も喉を通らなくなる。自分の存在そのものが危うくて、生きて行けないように感じてしまう。そういう状態を抱えながら神学校の授業をし、礼拝をし、説教をしていました。

どこに救いがあるのかを呻き求めて、聖書を読んでいました。そのようなとき、このローマ書第5章の言葉に出会ったのです。

**「19 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされる」**

ただ一人、イエス・キリストの従順によって多くの人が正しい者とされる。わたしは正しくなくてよい。イエス・キリストがおられるから、この方がただ一人神への従順を貫かれたから、それでよい。わたしの救いはこの方が確保していてくださる。わたしは生きることを許されている。生きていてよい。この言葉のゆえに、わたしは死なずにすんだのです。

先ほどの言葉で言えば、わたしはアダムの連帯から断ち切られて、キリストのうちに、**キリスト連帯**の中に確保されていることを知ったのです。

ルターは『キリスト者の自由』の中でこう述べています。

**「罪はキリストの中に呑み込まれ、溺れさせられてしまう。」**

キリストのうちにわたしの罪は溺死させられてします、というのです。パウロをイエスと切り離して、パウロのことを観念論だとか幻想だとか言う人がいます。しかしパウロの語ってくれた一言がわたしを闇から、死から救ったのですから、わたしはそういう人には組みしません。

## **5. 聖霊の呻き**

しばらく前に小川修という先生の3巻ものの『ローマ書講義』（リトン、2011-2013）という本を買ってとびとびに読みました。非常に教えられ、また共感するところが多かった。その中にアンセルムスという人の言葉が紹介されていました。アンセルムスは11世紀の人で、中世の哲学者、神学者として有名な人ですが、調べてみたら彼は英国のカンタベリー大主教を務めた人なので、聖公会の——まだ聖公会という教会ができるはるか以前ですが——大先輩に当たる人です。そのアンセルムスがこういうことを言っているそうです。

**「聖書は、読んでみて、分かればうれしい」**

**「わからないところは尊敬する」**

小川先生はこれを「偉いねー」と感想をもらしておられます。

聖書に対してはいろんな接近、読み方ができる。それは自由であってよい。こう読まねばならないというのではなく、自由に読んでよいと思います。けれども最終的にわたしたちは聖書の中から神の言葉を、神さまの声を聞きたいと願って読むのですから、アンセルムスの姿勢に学ば

い、大事に心にとめていたいと思います。

さて今日、もう一つ取り上げたいのは第8章です。第3のテーマ、「聖霊の呻き」です。

新共同訳では18節のところに「将来の栄光」という見出しがついています。ここには三重の「うめき」が語られています。

「8:18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。19 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」

ここでパウロは、救いを求めてうめく被造物のうめきを聞いています。この次にわたしたちのうめきを語ります。

「8:23 被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24 わたしたちは、このような希望によって救われているのです。」

そしてパウロはさらに聖霊のうめきを語ります。

「8:26 同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。27 人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。」

霊がうめく。聖霊がうめいて祈ってくださる、というのです。

わたしたちは弱い。何において弱いかというと、祈ることにおいて弱いのです。祈ることにおいて自分の無力を経験する。祈っても解決しない。祈っても何の良い方向への兆しもない。どう祈ったらよいかわからなくなることがある。パウロは祈りの人であり、祈って神の力を受けて働いた人ですが、そのパウロでも祈ることの無力を感じるがあったのでしょ。けれどもここからが大事です。祈ることの無力、自分の祈りの限界に至って、もうどう祈ったらよいかわからないとき、わたしたちに代わって、わたしたちのために、聖霊がうめいて祈ってくださる、というのです。

「“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」

ずっと重い困難を抱えて、苦しみつつ祈っていて、それで何の解決も変化のしるしもなく、もっと祈らなければと思いつつ祈り疲れて、無力を感じて、心が焦げついたような状態に陥ることがあるかもしれない。そういうとき、祈ることをやすんでよい。聖霊が祈ってくださるのだから、聖霊におまかせしてよい。聖霊がわたしの中で、わたしに代わってうめきつつ執り成していてくださるのだから。

「27 人の心を見抜く方は」とは、祈りを聞かれる神です。「霊”の思いが何であるかを知っ

ておられます。」

神は、わたしが自分のことを知っている以上にわたしのことを知っておられ、聖霊はわたしが願ひ祈る以上に、深く切に祈ってくださる。聖霊のうめきの祈りを、神はよく知って理解し、受けとめておられる。

わたしの力、わたしの祈りではなく、わたしの祈りが無力になったところで、わたしに宿ってくださる聖霊と神さまの間に深い交流が起こっている。だから大丈夫なのです。

主イエスは弟子たちと最後の食卓を囲まれたときに、ペテロにこう言われました。ルカによる福音書です。

「22:31 シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

ペテロの力と祈りは挫折します。しかしイエスがそのペテロのために祈っておられました。それをペテロははっきり知る必要がありました。イエスの言葉のとおり、ペテロは立ち直って兄弟たちを力づけます。

聖霊は、あるいはわたしの中いてくださる霊なるイエスは、わたしのために祈ってくださる。わたしたちも立ち直ったら、また人のために祈り、人を力づけるのです。

## 6. 終わりに

今から 45 年くらい前になるでしょうか。わたしの同志社の大学院生時代に、新約聖書の授業で高橋<sup>まさし</sup> 虔先生からこういう話を聞いたことがあります。ドイツ語で恵み（の賜物）のことを「ガーベ」（Gabe）、課題（務め、仕事）のことを「アウフガーベ」（Aufgabe = 恵みの上に）と言う。恵みという土台の上にこそ課題がある、と。

Aufgabe 課題

Gabe 恵み

神の恵みという土台なしに働いたらいずれつぶれてしまいます。

ローマ書の後半には、課題、生き方、働きのことが記されていますが、今日は土台に当たることの中から三つをお話しして、後半のほうに触れることはできませんでした。

パウロはこの手紙の最後、第 16 章でたくさんの個人名を挙げて、人を紹介して依頼したり、挨拶を託したりしています。細やかな配慮がこめられています。

「16:1 ケンクレアイの教会の奉仕者でもある、わたしたちの姉妹フェベを紹介します。2 どううか、聖なる者たちにふさわしく、また、主に結ばれている者らしく彼女を迎え入れ、あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けてあげてください。彼女は多くの人々の援助者、特にわたしの援助者です。3 キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっている、プリスカとアキラによろしく。……」

最後に、今の時代の悪しき力のうごめきを思い、20 節の言葉で締めくくりをしたいと思います。

「16:20 平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう。わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。」